

山の百花

遠足員 甲申 瑛子

【97】フシグロセンノウ

若い頃はほんの数年間だけ山登りをしてきたが、その後三〇年間は山とは無縁の生活だった。五〇代になって、再び山に登りだしたとき、周囲には一緒に登る仲間もいなかったもので、当時住んでいた東上線沿線の山に一人で出かけることが多かった。

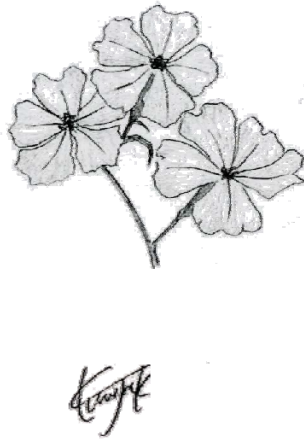
比企の堂平山で初めてフシグロセンノウを見たのはその頃である。堂平山から剣ヶ峰へ向かう尾根に、直径四、五センチもありそうな明るい朱色の花が咲いていた。大勢のハイカーが行きかうハイキングコースの道脇に咲く園芸種のような鮮やかな色彩の花に目を惹かれ、しばらく立ち止まって眺めていたことを思いだす。

ナデシコ科のフシグロセンノウという名と、夏の終わり頃の山地で普通に見られる花であることは後に知った。

まもなく私は遠足倶楽部に入会し、岩崎流ゆつくり歩きを学んだ。年々体力の衰えを感じるこの頃、若いときよりむしろ薬に山に登れている気がするの、花を見なが

らゆつくり登っているからだろ。逆に昔花に興味がなかったのは、健脚の仲間たちの後を追いかけるのに精一杯で、花に目を止める余裕がなかったのだと思う。

思えばフシグロセンノウは、私が中高年登山の楽しさを知りはじめた頃に出会った、記念すべき花だったような気がする。



【98】マルバダケブキ

最近、鹿の食害の話をよく耳にする。一昨年、南アルプスの小屋でも、鹿のせいでお花畑が見るかげもないと聞かされた。翌日登ってみると確かに花は少なく、驚

いたのはコバイケイソウの上部がいずれも鎌でスパツと刈り取られたようになっていたことだった。この有毒な植物まで若芽のうち鹿に食べられてしまったのだろうか。しかしトリカブトとマルバダケブキはどこでも見事な群落を保っていた。鹿が猛毒のトリカブトを食べないのはわかるが、マルバダケブキを敬遠するのはよほど嗜好が合わないのだろうかと思像するほかない。

鹿には嫌われても、真夏の草地で伸び伸びと咲くこの花が私は好きだ。特に山の斜面に腰が折れたように生えるダケカンバの林の下で、マルバダケブキのような高茎植物が一面に咲いているのを見ると、なぜか懐かしい風景に出会った気がする。

そう話すと、同行の天津講師が「これは南アルプス特有の景観です」と教えてくださった。

そうだったのか。それまで特に南アルプスが好きだと意識したことはなかったが、以来、あの景色をまた眺めてみたいと思ったりする。あえて山頂を目指さなくても、好きな花や景色を見るために登る、そんな登り方もいいなと思うこの頃である。